



外国人とともに生きる大田・市民ネットワーク 会報

つうしん

通信

No.125

2022-2.1

NEWSLETTER



特集：今更ながら気がついたこと

- ◆高校支援プロジェクト～高校での日本語支援～
- ◆にほんごのひろば 水曜日教室
- ◆相談現場から見たコロナ禍の外国出身者の生活困窮
- ◆大田区中国帰国者センターの事例から

お知らせ：国際都市おおた協会多言語相談窓口移転

【活動報告より】

支援者向けスタッフ研修「残留婦人3世の語り部の話を聞く」に参加して



特集：今更ながら気がついたこと

◆高校支援プロジェクト ～高校での日本語支援～

事務局が「OCNet 通信」で「今更ながら気がついたこと」で原稿を集めていると聞いて、手を挙げた。高校生に関することを語りたい。

OCNet で、2018 年から、都教委の外部人材活用事業の一環として、都立高校で放課後の日本語支援をしている。現在、対象は 3 校となり、4 人の支援員で 13 人の生徒に対応している。概ね、1 人に対し週 1 回、1 時間。私、琴崎はそのうち 4 人の生徒を担当。

当初の学校からの要望は、「日本語が不得手な生徒に支援をしてください」ということで、「内容や方法、手段はお任せします」ということだった。「教科を教えてもらうことは期待していません」とは言われたものの、目標自体が「進級できずに落第することを防ぐ」こと、そして「退学を防ぐこと」だったから、何らかの方法で教科の点数を押し上げることは必須だった。

もちろん、我々に教員免許があるわけではないので、教科の内容そのものを教えることは出来ない。しかし、大事なことは、「授業を聞いてもちんぷんかんぷんであることを防ぐ」ことだった。誰だって、全然わからないことを授業で 50 分聞いていればいやになる。我々がやったのは、現代文の教科書に出てくる芥川龍之介の「羅生門」とか夏目漱石の「こころ」とかのストーリーを噛み砕いて説明すること。これで、直接、試験の点数が取れるわけではないが、「勉強してる『感』」は持てたのではないかと思う。

OCNet 理事 こども教室水曜日担当 琴崎馨

そのうちに気がついたことがある。生徒たちが求めているのは、「勉強を教えてくれる人」ではない。「自分と向き合ってくれる人」なのだと。OCNet の中でよく聞く、「相手に寄り添う」姿勢の人である。通常、生徒たちが向き合うのは、友達、学校の先生、親たちの 3 種類しかない。特に日本語が拙い生徒の場合は、まともに辛抱強く聞いてくれる友達は稀である。そこで、都教委の外部人材としてとはいえ、毎週 1 回、まるまる 1 時間対面してくれる大人の存在は大きい。普通に考えてみれば、日本人の子にとっても同様だろう。そして、1 対 1 であることに意義がある。

したがって、意味があるのは生徒と支援者の間の信頼関係。残念ながら、支援者に代打、ピンチヒッターを用意するのはむずかしい。信頼関係を築くには、人によってはそれなりの時間がかかるので。

来年卒業する A 高校 3 年生の A 君が、「先生と週 1 回話しているうちに、人とも話せるようになった。以前は、人と話すのがこわかった」と言ってくれた。今では、コンビニでちゃんとバイトをこなしているのだから立派なものである。

というわけで、日本語支援と言いながらも、我々がやっているのは、狭い意味での日本語スキルではなく、広い意味でのコミュニケーション能力樹立の支援である。これが、言いたかったことである。

コロナが落ち着き、水曜日大人クラスの対面授業が11月から始まりました。皆マスクをし、授業後のティータイムもなしで、以前のOCNetの授業風景とは同じではありませんが、これがアフターコロナの日常となっていくのでしょうか。コロナで私たちの生活は一変しましたが、今立ち止まってコロナ前の日常を思い返してみると、とても不思議な気持ちになります。そこで「今さらですが、コロナ禍で気づいたこと」というテーマで学習者のお二人にお話を伺いました。お二人との会話をまとめ、文章にしましたのでお読みください。

張瑩さん（中国）

マスクをしての毎日には慣れません。人と人の距離が遠く感じ、気分が落ち込みます。バッグの中には必ず予備のマスクを忍ばせています。マスクを付け忘れて外出したり、ゴムが取れてしまったりするからです。ご飯を食べるときにはマスクを付けたり外したり、、、。本当にマスクをしての生活はいやです。それでも、マスクを付けていない人を見ると「なんでしていないの？」とイラっとします。人によって色々事情はあるのでしょうか。コロナ前に私はホテルで仕事をしていました。中国の航空会社が日本にホテルを作り、そのマネージャーになるはずでしたが、コロナでそれも叶わなくなりました。マイナスな事はもっとあります。マスクなのでメイクをしなくても良いので楽ではありますが、私はリップを付けるのが好きで、口紅を付けると気分が上がります。3年前に買った口紅が使わずにそのままあります。マスクを取って鏡に映った自分を見るとがっかりします。日本政府は補助金を全ての人に支給し、頑張っていると思います。中国政府は国民年金の支払いを50%免除してくれています。国の政策によって、人々の生活も左右されるので、国の施策はとても重要なことだと思います。

アルセアイーダソラヤさん（アルゼンチン）

今は少し良くなりましたが、1年半前は家とスーパーの往復だけの毎日でした。運動することが出来ないのが辛かったです。アルゼンチンでは、マスクは病気の時だけしか付けられないので、マスクをしての生活は慣れなくて大変でした。いつも考えていた事が、アルゼンチンに住む両親に簡単に会えないことでした。アルゼンチンの友達の親がコロナで亡くなったので、自分の両親がコロナに罹ってしまうのでは？といつも心配していました。私も張さんと一緒に、メイクをするのが好きですが、リップを使わなくなり気分が沈みました。今年の3月に長野へ旅行に行きましたが、ほとんどの店がクローズしていて街がとても寂しくて、悲しかったです。アルゼンチン政府のコロナ対策はあまり良くなく、ロックダウンが長すぎて多くの国民が職を失い、とても不満に思っています。良かったことは、外食もしなくなり、家族がいつも一緒にいる事です。それと、あらゆるところで消毒を徹底しているので、店や街の全てがクリーンになったのが、気持ちがいいです。

◆相談現場から見たコロナ禍の外国出身者の生活困窮

—在留資格「技能」の料理人のケース—

OCNet 理事 相談担当 西尾加朋

—昨年からのコロナウイルス感染拡大で、経済活動は大きな打撃を受け、特に飲食店や非正規雇用での就労者である、外国出身の人々の生活にも影響が及んだ。大田区内の、中華、インドネパールなどのエスニック料理店は、営業の制限を受け、軒並み休業や閉店に追い込まれ、外国出身の料理人が休業、失業し、困窮に陥った。以下は筆者が多言語相談窓口で対応したケースである。

エスニック料理店の雇用主が、労働関連の法律を遵守していないケースが非常に多く見られ、コロナ禍での休業、解雇で問題が生じた。本来、雇用主都合で従業員を休業させる場合は、休業手当の支給義務があるが、それを行っていないケースや、雇用主が雇用保険加入の義務を怠っているため、料理人も未加入の状態である場合が散見された。雇用保険未加入であると、失業手当が受給できない。一定期間の遡り加入の手続きと保険料の支払いを雇用主と非雇用主双方が行って、受給することもできるが、元雇用主とのトラブルを避けたいという理由で、申請をあきらめる人もいた。

コロナ禍で休業手当が受けられない被雇用者のため、政府が実施した「休業支援・給付金」の制度も、雇用保険加入が前提であり、やはり同様の理由であきらめる人が、特に中国の料理人を中心に、増えていった。さらに、料理店は休業状態が続いているのに、再開時の人員を確保しておきたいという理由で、解雇もされず、休業を長期的にさせられているという窮状を、料理人たちは訴えた。

このように、雇用主から理不尽な待遇を受けていても、料理人たちは、労使関係がこじれるのを恐れて、待遇の是正を求めず泣き寝入りをすることが多い。雇用主の多くは同国人であり、関係悪化の噂が、地域の狭いエスニックコミュニティの同業者全員に伝わると、その地域ではいられないことを、彼らは危惧しているのである。そして現に、雇用主自身が困窮にあえいでいるのも事実であった。

料理人たちは「技能」という在留資格で、母国の料理を提供する店での調理業で就労している。在留資格上料理人以外への転業は困難で、生活費を得るのが一層に難しい。極限状態の貧困に追い込まれても、就労在留資格であるがゆえに、生活保護を受給することもできない。コロナ禍で利用対象の幅が広がった生活福祉資金の貸付金や、給付金などの救済措置を利用できるだけ利用しても、生活費は減るばかりである。

彼らは、日本での生活をあきらめ、帰国を希望しようにも、航空便の減便、帰国費用の高騰や故郷の都市封鎖などで、帰るに帰られず、まさに「兵糧攻め」の状況に追い込まれていた。手持ちの生活費がわずか数千円になった人は、「反貧困ネットワーク」の「緊急ささえあい基金」のカンパを紹介した。

上記のケースから、見える問題がある。

まず、外国出身の雇用者と被雇用者の料理人の両方が、社会資源を取得するツールを多く持ち合わせていないことである。言語面の障壁で、日本社会にアクセスすることが難しい外国出身の料

理人は、同国人の同地域や同業種でのネットワークを形成し、そこから社会資源を取得することが多い。しかし、情報面での正確さは保証できない上、狭いつながりで人間関係がこじれた時の弊害も大きい。享受可能な日本の各種の保障や救済が届きにくく、法令や義務の履行についての知識も不足しており、結果として、より厳しい生活状況に直面している。

もう一つは、在留資格による生活上の制限を要因とした面である。職業の選択の自由はなく、生活保障の享受も限度があり、生存権を維持するための手段にすら、つながらない。特に、今回のように、人命にかかわる災害や緊急事態が発生した際に、それがより顕著になり、非常に深刻な状況に陥る。

◆大田区中国帰国者センターの事例から

大田区中国帰国者センターは、コロナ禍の中でもセンターを閉めることなく、帰国者の様々な相談に応じてきた。帰国者は高齢ということもあって自宅にこもりがちで感染の不安もあり、中には「コロナ鬱」のような方も見受けられた。

そのようなことから、2021年4月から主に単身世帯で高齢の帰国者に「一人暮らし支援」として月に数回電話を掛け、安否確認やその時の困りごとなどを聞くという事業を開始した。

コロナのワクチン接種券が郵送され、それぞれが接種予約に苦労している中、一人暮らし支援で電話を掛けた帰国者が「ワクチン？それは何です

今回のコロナ禍では、支援者自身も感染から身を守る必要があり、支援が十分に行えない状況であった。だが、ケースであげた著しい生活困難の状況に類似した状況の外国出身者は、他にも市井に多く存在する。彼らのおかれた脆弱な社会的な立場が、このような状況を派生させていることを理解し、解決の一助となる方法を模索し、できる支援をする努力を、支援者は行うべきではないだろうか。

社会を構成する一員である私たちにとっても、この状況は他人事ではなく、すべての人が困難に陥るリスクがある。そのための共生の意識を、全員が持つ必要があるように思う。

OCNet 理事 葵佐代子

か？」という反応。その帰国者は日本中がワクチン接種で大騒ぎをしていることを知らなかった。

何故か。その帰国者は日本語での会話はほとんど分からないし、中国語の字も読めない。となると、テレビは見ないし郵便受けに入っているものは全部宣伝に思えて捨ててしまう。確かに接種券の封筒には中国語でコロナワクチンの接種券であることが書いてあったが、その帰国者にとっては意味がなかった。

帰国者センターでは、その帰国者にコロナワクチンの説明をした。そして本人の代わりに接種券の再発行を依頼し、ワクチン接種の予約をして無事に2回の接種を終えた。

このことで気が付いたこと。

1) 識字の無い人が一定数いるということ

日本で暮らしている人の識字率は高いと思うが、高いと言っても100%ではないはずだ。幼いころから日本で暮らしていても何かの事情で学校に行けなかった人もいるし、国によっては必ずしもみんな字が書けたり読めたりするわけではなく、母語の識字がないまま来日した人も居る。自分や自分の周りの人は字が読めることで、字が読めない人の存在を忘れてやしないか。

2) 信頼できる人との繋がりが必要だということ

生活に必要な情報はどこから得るのか。自分のことを考えても、テレビ、ラジオ、インターネット、そして周りの人たちとの会話から得ることが多い。昨今はテレビやラジオより、インターネットを見ている人の方が多いのではないか。

テレビはなんとなくつけていれば「そんなことが起きているのか…」というニュースに触れることもあるが、インターネットは自分で欲しい情報

にアクセスする。基本、自分で探さないと見つけることができない。

では、周りの人からの情報はどうか。今や、SNS やらチャットやら、いろんな方法で人とつながることができる。そのこと自体は良いことかもしれないが、一方で誤った情報や誹謗中傷が流れることもあるから注意が必要だ。

それらを考えると、やはり信頼できる人とのつながりが必要で、そのつながりの中で自分にとって必要な情報を得たり、次に自分がどうするかを考え、決めることができるのではないだろうか。この事例は帰国者センターとその帰国者の間に「つながり」があり、「信頼」があったから発覚し、解決できたのだと思う。

信頼できる人。それは家族や友人、同僚でも良いし、身近で相談に乗ってくれる人でも良い。信頼は一朝一夕にできるものではない。信頼される「相談の受け手」になることは難しいことだが必要なことに違いない。

〇〇。〇。。〇。〇。〇〇。。〇。〇〇。〇。。〇。〇。〇。。〇〇。。〇〇。〇。

2022年4月11日 国際都市おおた協会多言語相談窓口が移転します

現在、大田区消費者生活センターの1階にある多言語相談窓口は、2022年4月11日、おおた国際交流センターの開設に伴って同センター内に移転します。

おおた国際交流センターは、京急蒲田駅から徒歩2分、アーケードの商店街「あすと」に面した新築建物の2階です。(住所:大田区蒲田4-16-8-201)

窓口では、「日本語の手紙の内容を教えてほしい」「離婚の手続きはどうしたら良いのか」「仕事でケガをしたが何の補償もない」「コロナ禍で働いていた店が閉店してしまった」「日本語を勉強したい」などなど、いろいろな相談を受けていますので、必要な方にご案内ください。

また、大田区国際交流センターには集会室もあり、国際交流団体が優先的に利用できます。それに伴い、mics の教室・多目的ルームは国際交流団体が利用することはできなくなりますが、オーちゃんネットに登録している団体は利用できます。OCNet は国際交流団体ですが、オーちゃんネット登録団体でもあるので、引き続き mics の教室・多目的ルームの利用が可能です。

但し、一か月の利用回数制限等があるので、もし、OCNet の活動で国際交流センター集会室、mics 教室・多目的ルームを利用する場合は、事務局までご連絡ください。

【活動報告より】

支援者向けスタッフ研修「残留婦人 3 世の語り部の話を聞く」に参加して

こども教室担当 石井千代子

2021 年 9 月 24 日(金)、アプリコ小ホールで、支援者向けスタッフ研修として「残留婦人 3 世の語り部の話を聞く」が開かれました。講師は首都圏中国帰国者支援交流センターの馬場尚子(しょうこ)さん、語り部(中国残留婦人 3 世)の山崎哲(さとる)さん。参加したのは 26 名(内リモート参加 4 名)でした。

山崎さんは帰国した残留婦人の孫になり、現在一橋大学院博士課程で社会学(特に満蒙開拓時代の時代背景)を研究している研究者。首都圏支援交流センターが主催する語り部研修の一期生で、研究の傍ら語り部として様々な場所で活動されています。

私は、中国残留婦人の方の話はもちろん、3 世の方の話を伺うのは初めてで、とても関心をもって参加しました。

講演の第一部で、山崎さんは祖母・幹子さん(中国残留邦人 1 世)が歩んでこられた生涯を、写真を披露しながら話されました。幹子さんは教師をしていた父親とともに家族で満州に渡り、戦争末期に侵攻してきたソ連軍から逃れるため悲惨な体験をされたそうです。ご両親や弟さんとも二度と会えなかったといいます。

第二部では山崎さんが語り部になったいきさつを語りました。彼は日本生まれで日本国籍をも

つ日本人ですが、生活の中心にあるのは中国の文化だそうです。両親との会話は中国語、食事也是中国料理で、長い間そのような自身の姿を周囲に隠すように暮らしてきたといいます。

しかし、自らのルーツを考えるようになり、「家族の中の継承」が大事だという思いから、自らの心の変化を語るようになります。

幹子さんの経験を通して戦争はいかに人生を変えてしまうかその残酷性を改めて知り、そして自らの根底にあるものを問いかける山崎さんの苦悩の大きさを想像して胸が熱くなりました。そしてまた悩みながらも「自分の中の多文化共生を生きる」という彼の言葉に逞しさを感じました。

今回の山崎さんの講演は心に大きく響くものでした。あの戦争の歴史を忘れないこと、改めて日本人としてのあり方を考えるきっかけとなりました。ありがとうございました。



おもな活動報告

■多言語無料専門家相談会

8月28日(土) 13:30~17:00

場 所: mics 教室実施方法: 対面およびオンライン(スカイプ)

専門家: 弁護士2人、行政書士2人

相談件数: 7件7人(2名対面、5名オンライン)

(内訳) 相談内容: 在留資格・ビザ3件、結婚・離婚1件、相続1件
住宅1件、その他1件

国 籍: フィリピン2人、ペルー、シリア、中国、フランス、ガーナ各1人

※オンラインの相談では区外の相談者が多かった。

※対面も実施したことで、オンラインでは相談できない環境の方も相談ができた。



■高校進学ガイダンス

10月10日(日) 13:00~16:30

場 所: 都立六郷工科高等学校実施方法: 対面

参加者: 12家族19名

(内訳) ネパール4家族・5人、フィリピン3家族・6人、中国3家族・4人
ミャンマー1家族・2人、日本(中国ルーツ)1家族・2人

今後の活動予定

■高校入学ガイダンス

4月17日(土) 会場: 池上会館(予定) 時間: 未定

※日本の高校のしくみ、奨学金、卒業後の在留資格などについて説明します。

その他、先輩たちの体験談や、弁護士や教員による個別相談も予定しています。

■OCNet 社員総会

5月22日(日) 会場: 山王会館

※現時点では対面での開催を考えていますが、状況によってはオンライン開催になるかもしれません。

発行・発行/一般社団法人 OCNet

URL: <http://www.ocnet.jp>

住所: 〒144-0051 東京都大田区西蒲田 6-36-14 TKK マンション 1F

Address: 1F, 6-36-14 Nishikamata, Ota-ku, Tokyo, 144-0051

TEL&FAX: 03-3730-0556 E-mail: jimukyoku@ocnet.jp